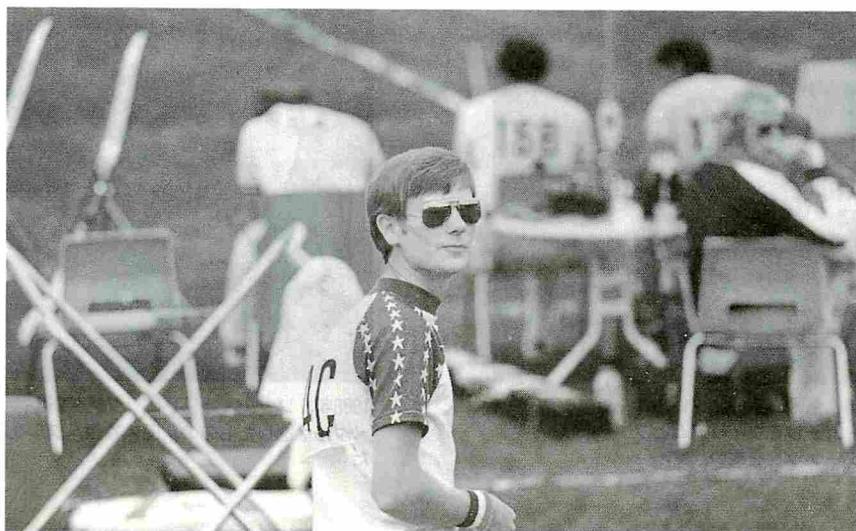


CHAPTER 13 CONFIDENCE

1976年7月、モントリオール・オリンピックのアーチェリー会場で見たダレルは僕の知る彼のなかでも一番やつれていました。顔はやせこけ、ニキビも目立っていました。しかし、不敵ともいえる自信に満ちたあの鋭い目の輝きはいまでも忘れられません。どうしても欲しいタイトル、4年に一度、そして彼にとっての最初のチャンス。そんな状況のなかで参加37名中、彼だけが自分の勝利

を確信してシューティングラインをまたいでいたのです。そして、結果は1264-1307点で圧勝。

あそこ、ダレルは自分の弓を白のハンドルに赤と青のスタビライザーで、アメリカを象徴するかのようディスプレイしていました。それはちょうどオハイオ州ハミルトンの実家の彼の部屋と同じカラーリングです。大会前、ニューズウィーク誌の記者がインタビューに訪問したとき、部屋



1976年、モントリオール・オリンピック。ダレルただ一人がゴールドメダルを手にするためにカナダにやって来ていた。そして、いとも簡単にそのメダルを手に入れた。

CHAPTER 13 CONFIDENCE

の一角に何も飾られていない空いている空間を発見して、そのことをダレルに尋ねました。それに対し、ダレルはきっぱりと「そこはモントリオールのゴールドメダルを飾る場所だ」と答えています。

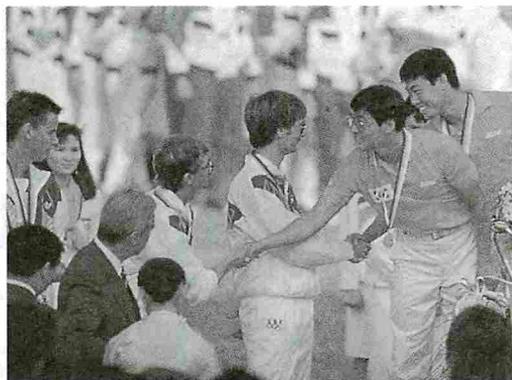
これほどの自信はどこからくるのでしょうか。たしかに、それは凡人からすれば異常であるがゆえに天才的です。現に彼は、代表には選ばれながらもアメリカがボイコットしたため出場できなかった1980年のモスクワをはさみ、8年後にはロサン

ゼルスでも2個目のゴールドメダルを、これまでも簡単に手に入れています。それも1317-1299点のオリンピック新記録です。しかし、それから4年後、初めてグランドFITAラウンドが導入された1988年のソウル・オリンピックでは、ダレルは意外な苦戦を強いられています。予選ラウンド1257点、19位で通過。1回戦18位、最下位でかろうじて通過。準々決勝1位。しかし、セミファイナルで惜しくも敗退、9位に終わりました。ここで3個目のメダルの夢は消えたのです。

「ダレル・ペイスの時代は終わったのだろうか!?!」
ずっと僕の頭の隅に引っ掛かっていた疑問でした。ちょうどそんな折、1989年9月、ヤマハカップ参加のためダレルの来日が決定。そこで試合前日にこの疑問を直接ぶつけてみることにしました。



1977年、全米選手権。ダレル、マッキニー、そしてウィリアムとファーストターゲットを射つ。



1988年、ソウル・オリンピック。ダレルは個人のメダルは逸したものの、団体に銀メダルを手にした。

亀井 ダレル・ペイスの時代は本当に終わってしまったのだろうか？

ダレル ある部分では、勝つということへの情熱が薄らいていることはたしかだ。ただ、それは自分の目標が少々小さくなったということで、いまは徐々にだけ目標を高いところへ向けつつある。僕にはまだ世界で優勝を争える能力はあると思っている。

亀井 では、去年のオリンピック前から弓具を変えたのも新しい目標へのチャレンジだったのかな。

ダレル そう思ってもらっていい。弓具についてはいろいろあるけど、一番大切なのは自分自身が納得することだ。それなのに、それをシューティング以外のことで悩まされるのは変なプレッシャーになってしまう。ロサンゼルス・オリンピック以降、そういうことでいろいろと悩まされてしまった。

亀井 つまり、競技以外の世界からのプレッシャーが現在の状況を作ってしまったわけだ。

ダレル そういうことだ。ただ、いまはそういう余計なことがなくなって、アーチェリーを心底楽しんでいる。もしチャンスがあれば、また世界にチャレンジするし、そのときは勝ると信じてるよ。

亀井 とはいってもお互いに若くはないし、アーチェリーに対する集中力は決して昔のままではないと思う。また、周りの状況も変わってきている。その辺はどう考えているんだろう。

ダレル たしかに、その意味では昔のようにはい

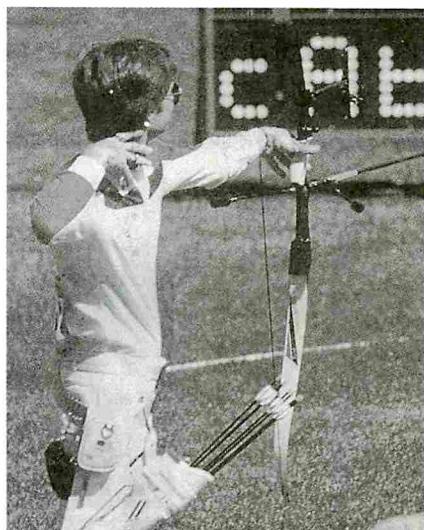
かないかもしれない。仕事もあり、家庭もあるからね。でも、そんななかでベストを尽くすしかない。現に僕はいま新しい家を探している。職場にも近く、シューティングレンジも近くにあるところをね。

亀井 しかし、仕事や家庭の問題は昔もあったことだし、もっと他の理由があるんじゃないかな。

ダレル だれもうまく射てないときがあったり、勝てないときがあるけど、僕のスコアは15年前とほとんど変わっていない。それで勝てなくなったのは弓具の進歩によるものだろう。弓具の進歩が多くのアーチアーにハイスコアを可能にした。

亀井 それはやはりカーボンアローのことかな。

ダレル アルミ矢のときは、エイムオフすることを知らなくてはいけなかったし、弓のチューニングも正確にする必要があった。ところがいまは、カーボンリムやポリエチレン系のストリングのおかげで、そんなことをしなくてもいいようになってしまった。それだけトップと、それ以外のアーチャーとの差が縮まった、と言える。



1988年、ソウル・オリンピック。準々決勝では、3個目のゴールドの期待をうかがわせたが…。

CHAPTER 13 CONFIDENCE

亀井 僕もそれは認めるけど、それに加えてグラ
ンドFITAラウンドの影響はどうなんだろう。

ダレル たしかにうまいアーチャーには苛酷なル
ールかもしれない。これまではベストシューター
が応分の扱いを受けることができた。でも、いま
は違う。

亀井 しかし、グランドFITAラウンドが導入さ
れて以降の、3回の世界選手権と去年のオリンピ
ックを見る限り、結局は強い者が勝利している。
弓具が変わりルールが変わっても、世界の舞台で
はラッキーは微塵も存在していない。実力のある
者がチャンピオンになる。世界は世界なんだ。

ダレル 僕が言いたいのは、昔のように勝ち続け
ることがものすごく難しくなってきたということ
さ。昨日の勝者は明日には敗者になる。トップで
あり続けることが難しい時代になった。

亀井 なるほど。話をカーボンアローに戻した
んだけど、最近僕は練習していて「本当にカーボ
ンはアルミを越えたんだろうか？」という疑問に
駆られることがよくある。その辺のことはどう考
えている？

ダレル 無風快晴の条件下ならまったく差はない
と思っている。

亀井 ではある程度の風、たとえば的上の旗が少

し揺れるぐらいならどうだろう。

ダレル 1300点アーチャーが射ったとしたら、カ
ーボンアローであれば1270点くらい、アルミアロ
ーなら1240点くらいかな。ここで言えるのはアル
ミの場合、好天と悪天候の差が大きく出るが、カ
ーボンではそれが小さくスコアが安定している
ということだ。

亀井 それは十分承知している。たとえばマッキ
ニーが1982年に樹立した50mの世界記録345点が
現時点の距離別、そしてトータルの世界記録のなか
でも実質的に一番高いと確信しているんだけど、
そのときも2114のアルミアローで記録されている。
カーボンじゃなくてね。僕が聞きたいのは、そこ
なんだ。

ダレル 少なくとも僕は今後アルミに戻すつもり
はまったくない。いま使っているカーボンアロー
を使い続けるつもりだ。

亀井 それは基本的には僕も同感だ。では、その
ことについて質問を変えるが、ダレル・ペイスは
そのカーボンアローで、条件が整ったとして、い
ったい何点まで射てるだろう？

ダレル 1360点かな。

亀井 それは現在のトップの力量が1360～1370点
ということだと思う。このことについては、僕も



1981年、全米選手権。
3年連続2位に甘ん
じる。

まったく同意見だ。そこまでなら実際に練習でも射っていたし、感覚的にも理解できるし。ただ、問題はこのラインを越えるのに何かが必要かということなんだ。少なくともカーボンアローだけの問題じゃない。

ダレル いまはまだわからない。ただ可能性はあるということだ。意識としては、現在の弓具の進歩から考えると常に1300点は記録できる。もちろん、それができるアーチャーは多くはないけど。でもその延長で考えれば、天候やバイオリズムといったすべてを整えれば、1380や1400点といった記録も夢ではないだろう。

亀井 ではもう少し具体的な質問だけど、いまのダレル・ベイスが世界チャンピオンに返り咲くには何か必要なのだろうか。

ダレル 前向きなポジティブな考え方だと思う。これまで僕は何度も勝ってきたけど、そのときいつも頭のなかでは「だれも僕を負かせない！」って思ってた。これはアーチャーによっても違うと思うが、たとえばマッキニーは「僕は勝つんだ、勝たなきゃいけない」って考えて射つ。僕はそうじゃない。「この試合を失いたくない」と考えるんだ。どちらも前向きではあっても違うんだ。しゃかりきにならないってことさ。

亀井 「リラックス」だね。

ダレル そうなんだ。

亀井 そのためには何をすればいいのだろう。

ダレル メンタルトレーニングだね。「子どもごっこ」さ。

亀井 もっと具体的に言うと……。

ダレル 親と子どもの二役を自分で演じることだよ。心のなかで子どもの自分に対して親の自分が教育するんだ。もちろん前向きの姿勢でね。「これはいいことだ、どんどんやりなさい」といった具合にね。そのとき、絶対に否定的ないい方をしてはいけない。「おまえのベストを尽くしなさい」というんだ。

亀井 決してネガティブになってはいけない。

ダレル その通り。「おまえはなんて恐ろしい子だ」とか「なんて馬鹿なんだ」とは絶対に言うてはいけない。

亀井 そのことは僕にも十分に理解できるし実践もしてきた。そして、いまも同じように実行しているつもりだ。問題は同じことをしているのに、昔は勝てたのにいまはそうはいかないということ。このメンタルな部分の違いは何だろう。

ダレル 集中力だと思う、多分。

亀井 それは最初に話した周りの環境が影響して



1983年、全米選手権。ワード、マッキニーとともに。この年マッキニーは6度目の優勝を飾り、ダレルは2位に終わる。

うまくいかないのかな。

ダレル そうだね。若かったときは1日中、朝から晩までアーチェリーのことを考えることができた。でも、いまは違う。アーチェリー以外のことに多くの時間を取られるようになってしまった。家庭や仕事も、そのなかのひとつだね。

亀井 そうすると、いまのダレルの当面の目標は
ダレル アーチェリーのできる環境を作り直すこと。そして、それに集中することだと思っている。メンタル、弓具、その他すべての面においてね。
(雑誌アーチェリー1989年11月号より抜粋)

だからこそ、いまのダレルから 学びたいこと

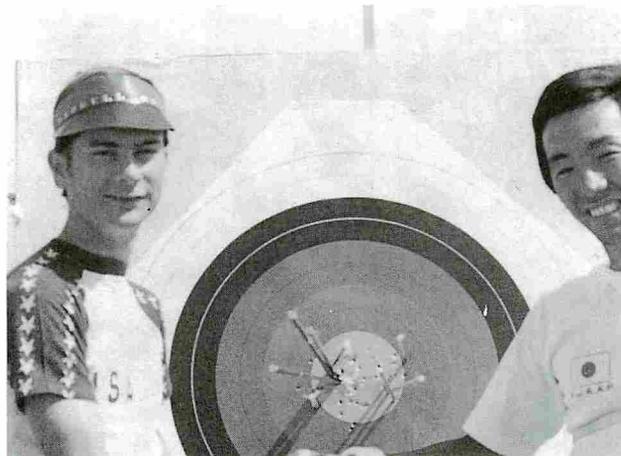
久しぶりにダレルに会っての印象は、「やはり若くなくなった」が正直なところでした。腹も少し出てきたし、頭も少し寂しくなってきました。しかし、そんな外見より、さらにそのことを強く感じさせたのは、彼の態度であり言葉でした。ここに掲載した以外にも彼とは話しているわけですが、昔の傲慢さや自信に満ちあふれた発言が減り、その反対に言葉の端々に自信のない様子がうかがえました。

多くのアーチャーはいつも強い人間に憧れます。

それは当たり前です。しかしほとんどの場合、その輝かしい栄光にだけに目を奪われ、そこに至る過程やそこから退いたあとの軌跡については関心を払おうとはしません。「現チャンピオン」そのものに興味があるのです。たとえば、当然のことながら、インタビューでも講習会でも脚光を浴びるのはいまのチャンピオンです。しかし、ここまでも述べてきたように、いま当たっている人間は射てば当たる状態のなかに置かれていることを忘れてはなりません。それを考えると、現チャンピオンから返ってくる「射てば当たった」といった在り来たりの答えより、僕が興味をもつのは「あれほど当たっていた人間がどうして当たらなくなったか」という部分です。それを知る方が、当てるためには役立つと考えるからです。

僕がいまもダレル・ペイスに憧れ理想を求めるのは、単に彼の成し得た栄光のすごさに対してだけではなく、それを踏まえた彼の生き方、姿勢に対して尊敬の念を抱いているのです。一言でいえば、彼は「アーチャー」だということです。当たっていた昔も、当たらなくなったいまも真摯なまでに「アーチャー」なのです。

1984年、ロサンゼルス・オリンピックの表彰台で、彼が2個目のゴールドメダルを授与され目に



1977年、キャンベラ世界選手権。1点差で並んだダレルを僕は最終回30点（9時方向オンラインの日本）で振りきり初めて彼を倒した。

涙するのをこの目で確認した夜、僕はロサンゼルスのホテルでNBCテレビの特別番組を見ていました。それは連日、各競技の速報とゴールドメダリストの横顔にスポットを当てるものでした。当然、その日はダレルの偉業達成を報じるものだったのですが、そこに映し出された彼はそれまでの他の競技におけるメダリストとは明らかに違っていました。防寒具に身を包み、電柱に登り作業をするダレルの姿です。彼の住むオハイオ州は冬には雪に覆われます。あのころ、彼は電気会社に勤めていました。

僕はアーチェリーの世界がメジャーでないことは知っています。しかしこれほどの栄光を成し得たチャンピオンに対し、あまりにも残酷で悲しすぎる現実です。

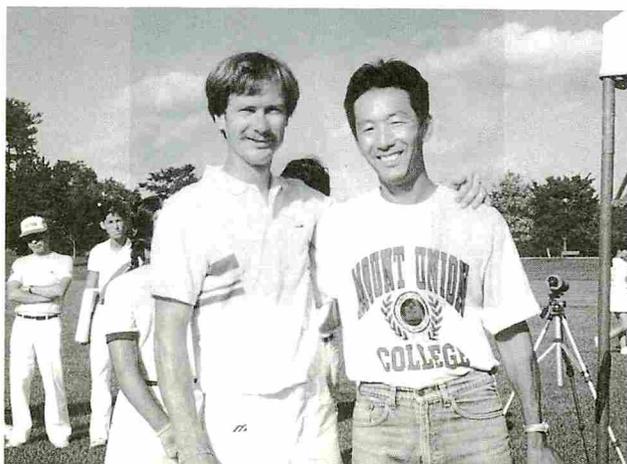
意識の点数1360点の意味するもの

対談のなかでダレルは、いまのカーボンアローで出せる点数を1360点と話しています。この1360は、非常に興味ある数字です。彼はこれより10年前、1341点の世界記録を樹立した直後、僕の「あと何点ぐらいまで出せる？」の質問に対し同じ答えをしているのです。とはいっても、世界記録

をたった1点更新するのに10年の歳月を要した事実からすれば、この天才の意識が10年くらいで変化しないのは当然といえば当然かもしれません。ただし、ここでダレルのすごさを理解する上で少し説明を加えておく必要があります。それは、「意識の点数」のことです。

よく試合の点数が、練習の点数より低くて当然といったことを平気で言うアーチャーやコーチがいます。しかし、これは大きな間違いです。それは低い点数でも同じことですが、たとえば1340点以上の記録を目指すとき。もしそのような認識なら、練習ではとてつもないハイスコアを維持し続けなければならないことになります。それにこのような点数になれば、いくらカーボンアローなどの最新の弓具を駆使したとしても、風や気温をはじめとした外的条件は無視できません。このことは「練習点数」と「試合点数」以前の問題として、「意識の点数」と「現実の点数」の間にズレがあることを意味しています。

「意識の点数」を言葉だけで説明するのは難しいのですが、自分が出したいと望む願望の点数ではありません。この点数なら条件が揃えば必ず記録できるという実感が自分の頭と心と身体で理解でき、想像し得る点数のことです。たとえば練習



1989年9月、ヤマハカップ。

でも試合でも、現実の記録としては1340点台であっても、自分の意識のなかでは、すでに1360点や1370点が射れている状態のことです。

この意識の点数が、ダレルの場合は10年以上も前にアルミの矢で1360点台に到達していたわけです。それは、条件次第では現実のものとなる可能性が十分に高かったことは理解できます。ただ残念なことに、現実には1341点だったということです。

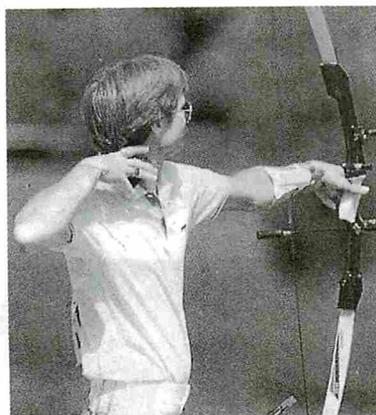
あれから10年、この間の最大の変革は1987年のアデレード世界選手権での新タイプのカーボンアローの出現と勝利でした。それは1983年のロサンゼルス世界選手権で登場したものの改良版で、旧タイプが話題性が先行しカーボンの特性が生かしきれなかったのに対し、新タイプは本来のコンセプトをきちんと具現化していました。そして、その恩恵を受けて、やっと世界で数人のアーチャーがダレルしか知らなかった未知の世界に現実足踏み入れたのです。

ダレルは曇天無風あるいは晴天無風の条件下で

カーボンがアルミを越えるとは言っていません。僕もまったく同じ意見です。風のなかならアルミの1240点がカーボンアローでは1270点になることはあっても、無風の1360点が1400点になるとは思えないのです。外的条件を整えば、ダレルは10年前に1360点を記録することもできました。しかし、それはカーボンアローを使ういまも同じということです。

すでに世界はカーボンアローの時代です。たしかにカーボンアローは悪条件での記録を飛躍的に向上させ、アベレージアーチャーの多くをトップに近づけ、そのなかの数人を今後も1340点台へと導くでしょう。しかし、意識の1360点は昔もいまも1360点のままなのです。

ダレルの偉大さがわかりますか。10年以上前に唯一ダレルだけが知っていた世界に、やっといまカーボンの力を借りて数人のアーチャーがたどり着いたのです。



1989年、ヤマハカップ(30m)。